

---

# 赤い着物

シュウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い着物

### 【Nコード】

N9267Z

### 【作者名】

シュウ

### 【あらすじ】

雪の降る街の小さな公園で出会った二人の話です。

雪の降る夜。

というよりもこの地域では常に雪が降っている。雪の降らない日は無いほどだ。

そんないつもと変わらない日常の中で、僕は彼女と出会った。

彼女は着物がよく似合う京美人な人だった。あとで聞いた話だけど、家が着物を扱う商売をしているらしく、彼女にとって私服が着物というのはさして珍しくはないそうだ。

僕が初めて彼女に会ったその日も、着物を着ていた。

いつもよりは少し暖かいけれど、雪がチラチラと降っていたのでそれなりに寒い。

散歩が趣味である僕は、大きな池に沿うようにある三日月の形をした公園を散歩していた。すると白い景色の中に赤い着物を来た彼女が向かいから歩いてきた。

赤い着物に白いストール、白いニット帽。着物も白だったら完全に風景に溶け込むことができたであろう。

僕はいつもと違う光景に驚いていたのと同時に、赤い着物を着た彼女に見蕩れていた。

キシキシと雪を踏みしめながら楽しそうでいてどこか儚げに歩く彼女。

今改めて思うと、きっとこの瞬間から僕の気持ちは彼女に惹かれていたのかもしれない。

だんだんと距離が縮まり、すれ違う瞬間に彼女は小さくおじぎをした。僕もつられて頭を下げる。

完全にすれ違いきったあと、僕は思わず振り返った。そして彼女の後ろ姿をぼんやりと眺めていた。

次の日も、同じ公園に来ていた。下心丸出しかと思われても仕方な

いと思っていた。

今日は散歩に行かないつもりだったのだけれど、彼女に惹かれた心はとても手強くて、また公園に連れて行けと胸の中で大暴れしていた。

ストライキを起こされては困るので、やれやれと思いながらも僕は意気揚々と散歩に出向いた。

昨日とさして変わらない時間。しかし昨日よりは雪が多く降っているように感じる。

視界が若干悪いが、この街で暮らしているなら対して問題になる量ではなかった。

彼女に会えることを期待しながら心を躍らせて散歩をしていると、向かい側から彼女が現れた。

今日の彼女は、昨日とは少し色合いが違うが、また赤い着物を着ていた。昨日のが『紅色』だとするなら今日のは『朱色』だった。

そして着物だけでは寒いのか昨日と同じく、白いストールと白いニット帽もつけていた。

昨日と同じようにすれ違うときになると、彼女は小さく頭を下げた。僕も同様に小さく頭を下げる。

そして僕は昨日と同じように振り返った。

「あのっ」

昨日は見送った彼女の背中に勇気を振り絞って声をかけた。もしかしたら声が上がっていたのかもしれない。

彼女は小さな笑みを零しながら振り返る。

「また明日もここに来ますか？」

彼女はその問いに首を縦に振ると、また元の方へへと歩いて行った。

次の日も僕は公園を同じ時間に散歩していた。もちろん彼女に会うためだ。

どう考えても不純な理由ではあったが、昨日の会話をしたあとで来ないわけにはいかない。

そんな言葉で自分を正当化しながら散歩をしていた。

今日も雪が降っている。昨日ほど多くはなく風も無いが、少し水分を含んでいるせいか重い雪が降っていた。

彼女と出会うであろう場所にたどり着いたと同時に、うつすらと赤い姿が見えてくる。

それを彼女だと認識するのに時間はかからなかった。

僕は少し小走りで彼女に近づくと声をかけた。

「こんにちわ」

彼女の着物は、先日が『紅色』、昨日が『朱色』だとすると、今日のは前の二つよりも断然濃い『緋色』だった。そして白いニット帽とストールはいつもの通りだった。

「こんにちわ」

彼女は微笑みながら挨拶を返してくれた。思わず笑顔になる。

その後、僕と彼女は短い時間ではあったが、談笑とは言えないほどの当たり障りのない立ち話をした。

この辺に住んでいるのか？どうして着物なのか？なぜニット帽とストールは欠かせないのか？など、本当にどうでもいいことを聞いたと思う。いろいろな質問に彼女は少し驚いたような時があれば、笑って答えてくれたりもした。

気が付けば僕ばかり質問する形になってしまっていたのに気がつき、彼女に聞きたいことは無いかと訪ねたところ、それはまた次回、と言われそこでお開きとなった。

いつものように彼女の背中を見送った僕は家路についた。

次の日。

また僕は彼女に会うために公園に来ていた。

しばらくすると彼女が現れ、白い景色の中に赤い姿を映した。今日は最初に見かけた『紅色』の着物だった。

話を聞くと、赤い着物は3色しか持っていないらしい。

「どうして赤なのですか？」

そう尋ねると、彼女は少しうつむいてしまった。

「今日は私の番ですよね？」

少しの沈黙のあと、顔を上げた彼女はいたずらに微笑み言った。  
彼女からの質問も当たり障りのないものだった。

どうして公園を歩いているのか？この辺の人なのか？私のことを知っているのか？などだった。

僕は隠すようなことは無かったので、質問全部に正直に答えた。

質問をしている最中に彼女が懐かしそうな顔で僕に微笑むのが少し気になった。

そのことを彼女に伝えると、気のせいだと言われてしまった。

たしかに僕の考え過ぎのような気もしたので、深く追求をすることはなかった。

また僕は彼女の背中を見送ってから家路についた。

それから2、3日は彼女と公園で話すのが日課になっていた。

彼女と他愛もない会話をして、帰路につく。それだけでとても充実した日々を送れていた。

ある日。

僕は彼女と会ういつもの時間に少し遅れてしまった。

公園につくと、いつもの時間よりも少し遅れてしまっていたことに気がついた。

男性として、女性を待たせるのは御法度なので、できる限り急いだ。  
しかし現実とは残酷なもので、彼女よりも遅く着いてしまった。

どんな罵声を浴びせられてもいいように覚悟を決めて彼女に近づいた。

自分の足元を見て待っていてくれた彼女に、遅れてしまったことを詫びた。

赤い着物を着た彼女が顔を上げると、目から涙が溢れていた。  
どうしたのかと思って聞いてみた。

「ごめんなさい。今日は来てくれないのかと思いました」  
どうやら僕が来なかったことを心配してくれたらしい。

申し訳ないと思い何度も詫びた。彼女はすぐに平静を取り戻し、二人でいつも通りに会話を楽しんだ。

その次の日。

僕はまたいつもの時間に遅れてしまった。加えて昨日よりもまた少し遅い時間だった。

あれだけ詫びた直後にこの遅刻。会わせる顔が無いと思いつつも、いつもの場所へと急ぐ。

彼女はまた足元を見ながら待っていてくれた。

彼女の元へたどり着くなり、昨日よりも深く詫びる。

そして顔を上げた彼女は目に涙を貯めていた。

「申し訳ない」

「いいのです。もう時間がないということなのでしょう」

僕は彼女が言った言葉の意味がわからなかった。

「あなたはもう死んでいるのです」

彼女の話によると、僕はもう死んでいて、この世に居ない人間らしかった。

全然実感が湧かない僕に彼女はいくつか教えてくれた。

僕がこの公園で死んだ事。時間に間に合わないのは、この世に留まることのできる時間があまり残されていないのでは無いかということ。実際に僕の頭の上に雪が積もっていないということ。

言われてみれば合点がいく部分もいくつかあった。

彼女と毎日別れてから次に公園に行くまでの記憶がぼんやりとすぎていること。あまり寒さを感じないこと。雪道なのに歩きにくいこと。そして僕自身の名前を思い出せないこと。

そして色々と言った彼女が最後にこう言った。

「私はあなたの婚約者でした」

「婚約者ですか？」

はい、と頷く彼女は再び目に涙を貯めていた。

残念ながら僕にはその記憶が無いことを伝えた。

「私はあなたがこの世を去ってから毎日泣いていました。もしかしたらあなたがよく散歩に来ていたこの公園ならば会うことができるかと思い、雪の白にも映える赤い着物を選んで来ました」

白いニット帽と白いストールは僕が贈ったものだという。

僕は思った。なんて罪な男なのだろうと。自身がこの世を去った時に彼女に悲しい思いをさせて、何も記憶が無い状態で幽霊となって彼女にもう一度心を惹かれ、拳句の果てには再び泣かしてしまう始末。

僕は自分自身が情けなくなってきた、幽霊で痛みはないが自分の頭を何度も叩いた。

「そんなことをして自分を傷付けるのはやめてください」

「僕はもう痛みを感じません」

「私の心が痛むのです」

自分の胸を押さえて泣き出す彼女。それを見て、みっともないことをしてしまったと後悔する。

「僕に何か出来ることはありませんか」

きつと幽霊になってしまった僕にはそんなに時間が残されていないのだろう。

ならば最後ぐらいは彼女が望むことをしてあげようと思った。

彼女は少し考えるような仕草をした。

「私を抱きしめてくれませんか」

「しかし僕は幽霊なのであなたに触れられません」

「いいのです」

僕は彼女の目の前まで歩み寄り、触れられないが彼女を抱きしめているように包み込んだ。

彼女もなんとなく抱きしめられているような感覚になっているように目を閉じて立っている。

その時、僕の中に記憶が戻ってきた。しかしそれと同時に自分のか



らだが消えていくのが分かった。きっと時間が来たのだろう。

彼女は目を閉じているので気づいてはいないが、もう足が見えなくなっていた。

だんだんと蘇ってくる記憶の中で、笑顔の彼女と僕が楽しそうに笑っている光景が浮かぶ。

彼女の笑顔は、この公園で話していた時と同じような笑顔だった。

僕が病で倒れてしまった時の記憶が思い浮かぶ。

彼女は昨日、遅れてきてしまった僕を心配して泣いてくれた。あの時と同じような顔をしていた。

本当ならばもっと前に気づくべきだったのかもしれないことを、この別れが近づいてきている今になって思い出している。

そんな自分が悔しいのか、彼女にさみしい想いをさせてしまっていたことが悲しいのか、それともこの今迫ってきている別れが悲しいのかわからないが、僕の目から涙があふれ出てくる。

もう胸の辺りまで消えてしまっている。本当に時間が無くなってきた。

僕は彼女の名前を呼ぶ。驚いて顔を上げる彼女。その目には大粒の涙が流れていた。

病のせいで伝えられなかった言葉を彼女に伝える。

「今までありがとう」

「私の方こそありがとうございました。ここで話せた時間はとても楽しかったです」

「僕も楽しかった。じゃあ、さようなら」

その言葉に彼女は涙を流しながら、もうほとんど頭が残っていない僕に、満面の笑みで返した。

心残りが無いと言えば嘘になるが、とても晴れやかな気持ちだった。天へと登って行く途中、真っ白な景色の中に、一つだけ赤い模様を見つけた。

終わり。

（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけると大変嬉しく思います。

はじめての短編となりますので拙い文章ですがご愛嬌ということで  
多めに見てください。

短篇集として出す予定だったものを短編として投稿し直したものと  
なります。

良かったら他の連載小説とかも読んでいただけたら嬉しいです。  
でも作風は全然違いますので気を付けてください。

文学チックにかいてみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9267z/>

---

赤い着物

2011年12月28日23時46分発行